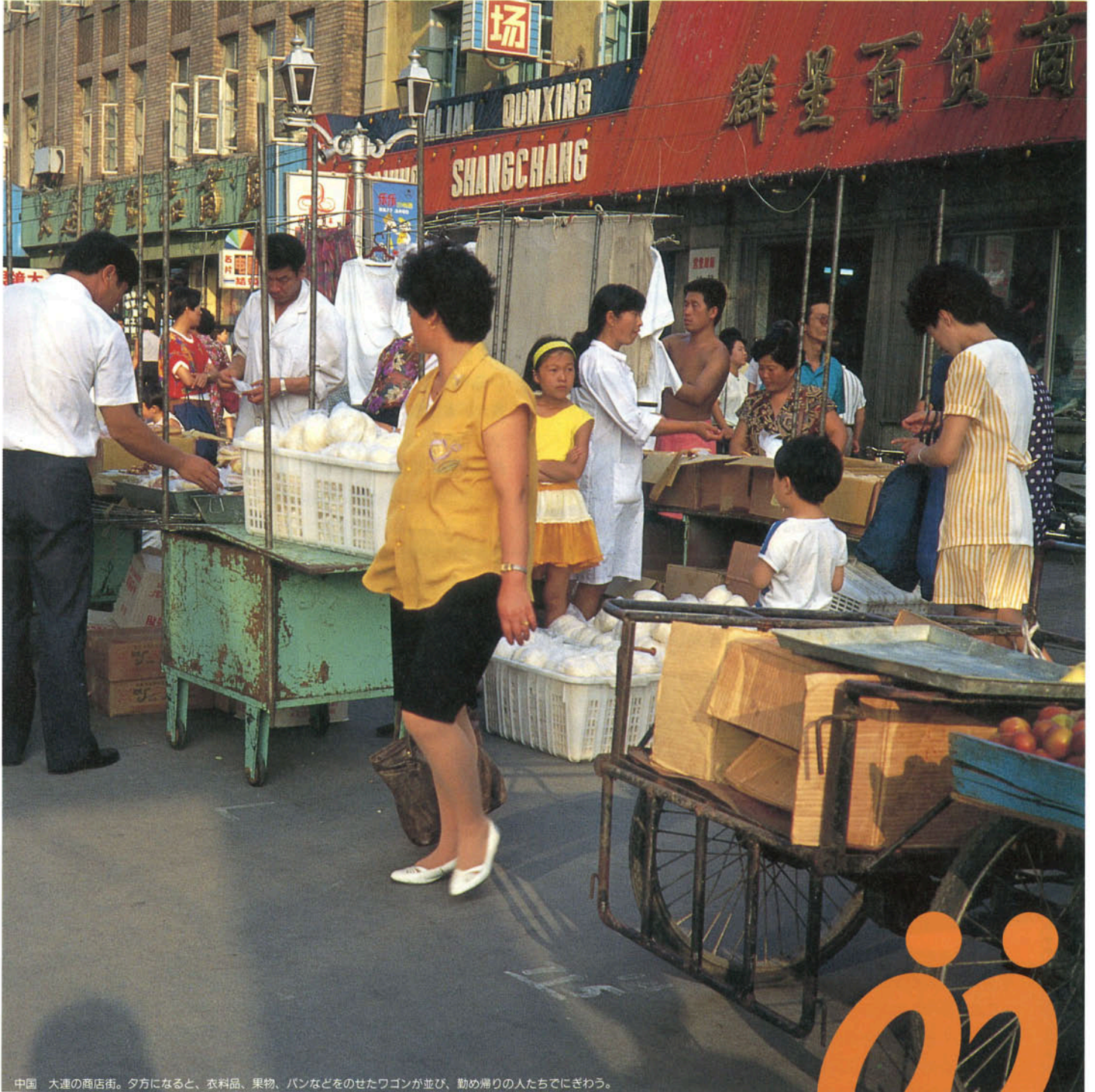


Asian Breeze



中国 大連の商店街。夕方になると、衣料品、果物、パンなどをのせたワゴンが並び、勤め帰りの人たちにぎわう。

いま、女性たちは — WOMEN TODAY —	2
女性の地位向上のための行政官セミナー	3
フォーラムの出版物	5
第2期 海外通信員レポート特集	6
第3期 海外通信員紹介	10
フォーラムの窓	11

お
KFAW

JUNE 1993 No. **8**

いま、女性たちは——WOMEN TODAY——



ジャーナリスト

チチュウメイ

思えば私の大学時代の最大の収穫の一つは、アジアの人たちと友人になれたことだろう。留学先のハワイ州立大学には当時、60か国を超える国々から学生が集まっていた。

友人となった彼らとは、卒業後の今も音信のある人、又はそれが絶えた人とさまざまだが、彼らと共に過ごした時間こそが、ノンポリで社会的意識も低かった私に、アジアに対する視点を拓く扉となってくれたような気がする。

いまでも強く印象に残っている学生がいる。チュチュメイというビルマの留学生だった。つややかな黒髪、浅黒い肌にくっきりとした二重瞼の大きな目、笑うとこぼれる白い清潔な歯並び——彼女はまるで菩薩様が人間になったような穏やか、かつ、高貴な趣きの人だった。「東洋の神秘」とはこんな美しさが、と私は感心し、まるで宝塚のスターに憧れるように、彼女に憧れた。今振り返ってみると気恥しくなるようなミーハーだった。

だからある日、彼女が泣き腫らした赤い目でキャンパスに現れたとき思わず根掘り葉掘り、そのわけをきかすにはいらなかったのだ。

彼女の涙の原因は、当時ビルマ政府の高官だった父親からの一通の手紙だった。父親は、彼女がハワイ大学で真面目に勉学をしていないという噂をきいて強く叱責してきたというのである。

彼女が真面目でないなんてことはあり得ないのだからその旨手紙に書いて父上に送れば済むことではないかという私を、チュチュメイは悲しそうな眼差しで見た。

そして説明した——ビルマは自由の国日本とは全く異なること、留学生である自分は、家族に対してだけでなく、国家に対しても責任があること、自分は真面目ではあるが不真面目だと噂が故国に伝えられたことは、自分にとって父親にとっても極めて不名誉であること、またその「悪評」が父親に対して政治的に不利に利用される怖れが強いこと、等である。

そして彼女はまた涙を流して言った——「父になにかあったらそれは私の責任だわ」。

そのとき初めて、私は彼女の背負っている国家の重みに気

付かされたと言える。クーデターを重ね、激しい対立を重ねて樹立された社会主義の国が当時のビルマだった。おまけに世界で最も閉ざされた国と言われる程ビルマは内向きの国で、そして貧しい国でもあった。そのビルマからアメリカの大学に留学していることの意味は、日本人などには測りしれない重大な責務を負わされることでもあったはずだ。日本風と言えば幕末の日本の留学生にも匹敵する使命を、チュチュメイは帯びていたのだ。

簡素なブラウスに巻スカート姿のチュチュメイは、前にもまして図書館に通い、卒業し、そして帰国した。

が、その後の彼女の消息はクラスメートのだれも知らない。そして、ビルマはミャンマーとなった。扉はますます閉ざされて今日に至っている。

日本では忘れ去るのがよいとされているかのような国の存在が、人びとの生活の決定的要因となっているのがいまのアジアであり、世界の国々にの現状だ。だからこそ、是と非の両面を含めて国が個人に及ぼす影響について理解しなければ、アジアの人びとの心を、本当に理解することはできないのだ。

そう考えれば、日本にやってくるアジアからの労働者についても自ずと別の視点が生まれてくるのではないか。

つい最近、中国から東大に留学し、修士号をおさめてある一流日本企業の東京本社に就職した友人、陳京麗が、吐息まじりに言った。

「このまま日本にずっといても私と日本の距離は縮まりそうにないわ。日本社会の視線のよそよそしさに疲れてしまったから、アメリカに行くことにしたの」

彼女は文化大革命の混乱の中で農村に下放され、のちに北京に戻って大学に入り、そして何年後輩の学生たちと共に卒業した。卒業の頃、中国社会では本当の自分らしさを発揮して生きることは不可能だと悟り、苦勞して日本留学の機会を实らせた。

だが日本に来てみると、日本はプラスチックの国のように、見た目には美しいがツルツルとしていて中に溶け込むきっかけとなる手がかりが非常に乏しい国だったというのだ。

それは、日本人の、相手に対する関心が浅いということでもあろう。たとえば京麗の体験した文化大革命や現在の中国社会における自由の質などについて、日本人は余り知ろうとしないということにもなるだろう。

京麗もその他のアジアから働きに来ている人びとも、単に経済要因によってのみ、日本に来たのではない。人間としての自由を求めて来たというもう一つの側面を理解することができれば、日本社会の彼らに対する視線は、少しは優しくなるのではないだろうか。懸命に生きるアジアの女性たちから学ぶことの必要を痛切に感じるのだ。

女性の地位向上のための行政官セミナー

アジア女性交流・研究フォーラムでは、JICA九州国際センターの委託を受けて、2月12日～3月2日に「第2回女性の地位向上のための行政官セミナー」を行いました。

このセミナーは、女性行政のマネージメント能力の向上を目指して昨年から開催しているもので、女性問題の解決に向けて各国が情報交換を行う場となっています。今回は、アジア・太平洋地域、アフリカの6か国から6名の女性問題担当行政官が参加しました。

研修内容は「開発と女性(WID)」の視点からプログラムされたもので、国と地方自治体が相互に連携を図りながら、組織的・計画的に各種の女性施策を推進している日本の行政の理念及びシステムについて紹介することをねらいとしています。

今回は2回目ということで、昨年の経験を踏まえ、農村生活改善対策、学校教育対策、障害福祉対策などを新たに研修科目として取り入れるとともに、女性問題の解決にとって欠かすことのできない国際的連帯に配慮し、カントリーレポートの発表を市民に公開するなど、内容の充実にも努めました。

また、実地に女性施策を学んでもらうため、講義に加えて、北九州市内にある関連施設の視察を多数行いました。このほか、研修旅



▲JICA九州国際センターでの開校式

行として埼玉県にある国立婦人教育会館や福岡県朝倉郡の農村地域を訪ねました。特に農村の視察では、イチゴやランなどの生産現場の訪問や、女性による自主生産グループとのディスカッションも行いました。

次のページに、公開のカントリーレポート発表会での各研修員の発言内容の一部を紹介します。



パキスタン

パキスタンは1980年代に世界でも5番目の速さで経済成長したにもかかわらず、社会制度や社会資本の整備は依然十分ではない。特に、女性に関するこれら社会面の整備は驚くほど遅れている。行政、財政の観点から見た場合、そうした障害になっているのは、社会部門に割当てられる資源、財源が少なすぎるということであり、急速な人口増加によって社会サービスが今やパンク状態になっている。

パキスタンでは、5,000以上ものNGOが社会福祉部に登録されている。その活動は国家的レベルのものもあれば、草の根レベルのものもある。そのうち、WID活動を行うNGOについて大きな役割を果たすことができるように、政府は資金援助を行っている。これらNGO活動の主なものは、教育、母子保健、職業訓練、技術開発、所得増額信用貸付や貯蓄計画、女性関連情報の普及などである。

タイ

女性の半数は、初等教育またはそれ以下の教育しか受けていない。小学校から中学校への進学率は女性でわずか38%、男性で44%であり、中学校での男女の比率は6:4である。この差は、農村ではもっと開くことになる。統計によると、女性の非識字者の87%と、初等教育における女性の中途退学者の86%が農村居住者である。

タイでは、慣習的に、女性は家庭にいて家事を行い、男は外で米を作るというふうに言われてきた。きちんと家庭のことをして、子供の面倒をよくみて、料理がうまければ、女性は家宝として扱われた。経済的困窮のために女性が台所から離れて外に働きに出るようになっても、このような伝統はいまだに残っている。

政治の分野での女性の進出は、世界の国ぐにと比べるとやや低いように思われるが、毎年上昇の傾向にある。地方レベルでは、女性のリーダーの数は、1984年の214名から1989年には1,957名に増えた。州議会の議員のうち女性の比率は、1981年の2.8%から1989年には4.6%へと上昇している。同じ状況が国家レベルでも見られる。

スリ・ランカ

スリ・ランカでは、教育はすべて無料で、国民は性別に関係なく、初等、中等、高等教育とすべての教育レベルに平等なアクセスを持っている。そのため、他の開発途上国と比べて、スリ・ランカは高い識字率を誇っており、男女とも80%を超えている。しかし、貧困により教育が全く受けられなかったり、中途退学を余儀なくされる子供たちもいる。教育を受けていない人の割合は女性で10%、男性で9%である。

また、スリ・ランカの労働人口は男性401万人、女性196万人で、女性は農村とプランテーションに集中している。多国間援助や二国間援助を受けたNGOが数多くの女性所得向上プロジェクトを推進しているものの、技術や訓練の不足から大多数の女性はいまだに農業や小規模産業、家内工業などに従事している。従って女性の開発に対する貢献度は、国全体の統計の中に現れてこない。そして、女性は依然として開発の恩恵から遠い存在である。

ケニア

政府は国家の発展を図る上で、女性問題を重視している。しかし、ケニアでは、女性の地位向上を妨げる障害が依然存在している。女性の大多数は零細企業に従事しているのに対して、男性は大企業で働いている。また、政策決定の機構に女性の代表者がほとんどいない。何かの意思決定を下す段階になると女性は蚊帳の外に置かれる。

さらに、女性の地位向上を妨げる壁になっているのは、開発において女性を男性と平等なパートナーとして見ない社会の中での伝統的姿勢である。女性はいつも、子供を生み、育てるものとしてしか見られていない。そのほかの障害としては、性差別撤廃に関するデータが不足していたり、担保物件がないためローンを受ける機会が限られたり、経営や生産等の適正技術が不足したり、女性の理想となるモデルが欠如していることなどがあげられる。

マレーシア

政府は国家発展のために女性の役割の重要性を認識している。それは最初の「婦人の日」が30年前に定められたことから明らかにある。そして1989年からは国家女性政策が実施されている。

労働法によって、経済・社会活動の全部門で雇用の機会が保障されている。女性は主にプランテーション産業や商取引、貿易、製造業に従事し、男性と同じように自由企業経済の中で自由を保障されている。しかし、雇用の状況が急速に悪化する中で、現実には、女性の経済活動は数かすの束縛や制約を受けている。その一つとして、家庭と仕事の二重の責任によって、労働市場における女性の流動性と参加が阻まれていることがあげられる。また、女性は家庭収入の共同の「稼ぎ手」としてではなく、収入を補う二次的労働者として見られており、そのため、女性を対象とした所得増額計画にあって、逆に家庭の主婦の役割が強化され、新しくもっと雇用に役立つ技術修得の機会が女性にはほとんど与えられない。

パプア・ニューギニア

パプア・ニューギニアの人口は、女性160万人、男性180万人で、そのほとんどは農村に住み、野菜栽培や漁業で生計をたてている。農村に住む大多数は安全な水や基本的教育、さらに保健サービスを受けられない。道路の整備が行き届いていないので、医療施設へ行くのにも長い道のりを越えて行かなければならない。そのため、女性は開発の仕事のための時間をすべて取られてしまう。

推定によると、女性は労働力人口の46%を占め、その85%が食料の生産及び加工に従事している。

女性は次第に新たなタイプの職業に就き始めているが、その数は男性に比べるとまだまだ非常に少ない。前副首相のアコカ・ドイ氏は1989年の予算発言で、「女性は国家の宝とされるべき人的資源であるにもかかわらず、活用されずにいた。その登用率は、公務員でわずか20%、中間または上級管理職においては3%以下である」と述べている。

フォーラムの出版物

アジア女性交流・研究フォーラムは、アジアの女性に関する情報をより多くの方が手に提供するために、各種印刷物を出版しています。このコーナーでは、新刊書をご紹介します。

中国の女性

—アジア女性シリーズ No.1—

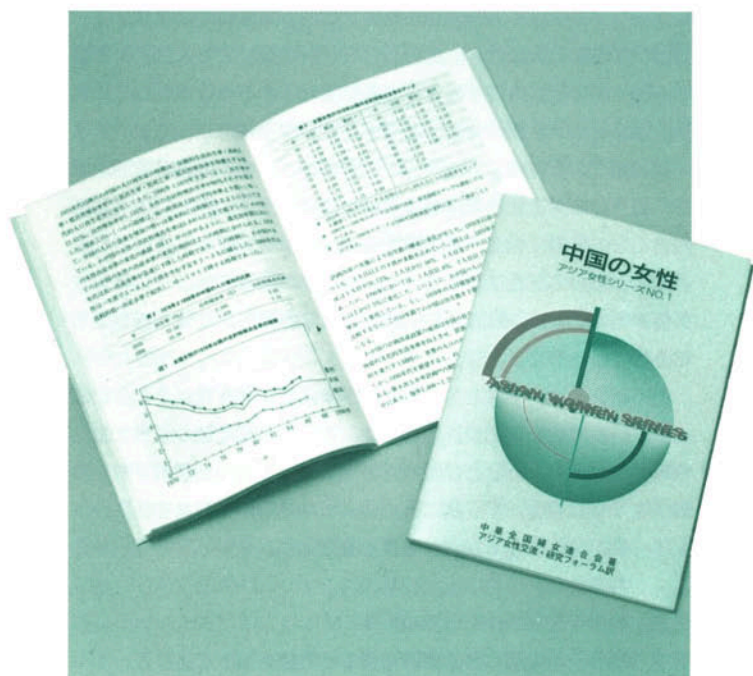
アジア諸国との相互理解を図り、国際協力を進める上で、国の状況をお互いに知り合うことは極めて重要なことです。特に、「開発と女性」に対する関心が高まる中で、女性に関する情報の共有の必要性は非常に高くなってきました。しかしながら、これまで、客観的なデータをもとに書かれたアジアの女性に関する書物は非常に少なく、女性を視点にとらえた統計資料も入手がとて困難でした。

フォーラムでは、このような時代の要請にこたえて、アジア各国の女性の実態や女性を取り巻く状況を紹介する「アジア女性シリーズ」を出版することになりました。シリーズは、各国の女性問題担当国内本部機構(ナショナル・マシナリー)の協力を得ながら、連続して国ごとに出版していく計画です。

シリーズの第1号は、「中国の女性」です。中華全国婦女連合会の執筆によるもので、女性の状況を、人口、家族、保健、教育、労働、社会参加などの項目別に解説し、女性の権利や自由を保障する法律も紹介しています。

1995年に北京で開催される世界女性会議に先駆け、中国の女性の現状理解のための入門書として、広くご活用ください。

(定価 1,000円・送料別)



※出版物のお求め・お問い合わせは、アジア女性交流・研究フォーラム (093) 551-1220まで。

現代タイの家族意識の研究

—バンコク、ソウル、福岡調査の比較と共に—

フォーラムでは、研究部門の主要事業の一つとして、アジア諸国の研究機関と共同で、経済開発が社会の基礎集団である家族に与える影響について意識調査を実施しています。

1991年度の韓国に次いで昨年度はタイを調査し、その結果を取りまとめました。双系制と言われるタイの家族の中に経済開発によって大きな変化が現われていますが、本書ではその実態を、ソウル、福岡との比較の上で明らかにしました。タイの家族についての最近の統計データも紹介しています。 (定価2,000円・送料別)

アジア女性研究 第2号

女性に関する研究は、大学や研究機関における専門の研究者によるものだけではなく、生活に根差した、女性たちの幅広い知的活動に支えられるものです。アジアの女性の生活や女性たちが抱える問題について、討論と情報交換の場を提供するために発行しているのが「アジア女性研究」です。今号では「環境と開発と女性」を特集し、第3回アジア女性会議の公開シンポジウムと、研究と討論・テーマ部会の模様を収録しました。また、1979年以降の中国の女性研究の動向について、北京大学教授齊文穎さんから寄せられた特別寄稿も非常に興味深い内容です。自由投稿論文、書評にもご期待ください。 (定価1,000円・送料別)

海外通信員レポート集 vol.2 1992-1993

第2期海外通信員は13か国19人。さまざまな地域のさまざまな職業の通信員が「家庭教育と女性」という統一テーマでレポートを執筆しました。中国の一人っ子のしつけ、シンガポールの女性団体が童話を題材にして行う子供向けのフェミニズム教育、詩や歌の中で「家の光」にたとえられるフィリピンの女性の現状、タイの尼僧院で行われる宗教教育や職業教育など、盛りだくさんの内容でとても読みやすい一冊です。 (定価800円・送料別)

アジアの女性と家庭教育

—女性情報マトリックス事業報告書—

女性情報マトリックス事業は、アジアの人の生活や女性の状況を教育という観点から探ろうと企画されたものです。事業のメインは、北九州市民8人で構成された委員会の海外調査です。本書は、中国、スリランカ、マレーシア、シンガポールでの調査報告を中心に、国内外の有識者からの家庭教育に関する特別寄稿も収録しました。 (無料・送料別)

第2期 海外通信員レポート

Part 2

〈テーマ 家庭教育と女性〉

スノーウーマン

山口のり子さん
(シンガポール)

「男は仕事、女は家庭」ではなく、女と男がともに「仕事と家庭を」という生き方ができるような世の中にするためには、教育のあり方が、学校教育でも、社会教育でも、家庭教育でも変わらなければなりません。

シンガポールの学校教育の変革の一つとして、1994年から家政科がデザイン技術科とともに、すべての中学生にとって必修科目となります。またその学習内容は、これまでの料理や裁縫から環境保護にまで広げられ、資源の節約やリサイクルについても学ぶそうです。

社会教育では、女性問題の社会教育に活動を続けているAWAREが、子供向けのプログラムを始めました。

私の娘と息子も「子供のための考え方の冒険プログラム」(フェミニズム的な絵本の読み聞かせ)に参加しています。1回目の絵本は「スノーマン」でした。リーダーが絵本を子供たちに読み聞かせた後、「スノーマンがいるなら、スノーウーマンがいてもいいんじゃない? どんなスノーウーマンがいい? 髪の毛は? 太っている? ネクタイは? じゃあ自分で好きなスノーウーマンを作ってみない? 名前も付けてやろうよ」という具合に進むのです。男の子の一人は「スノーウーマンはいやだ。スノーマンがいい」と言い張りましたが、最後には彼も含めていくつもの可愛いスノーウーマンができました。次回は女のサンタクロースを作るそうですし、その次には、7人の小びとたちに料理を作ってやるのではなく、作り方を教えてやったり、悪い女王に簡単にだまされない賢い白雪姫が出てくるお話もあるというから楽しみです。

家庭教育は子供に最も大きな影響を与えますが、変革が一番難しいのではないかと思います。子供たちはどうしても親の姿を通して、女のあり方、男のあり方を自然に体得してしまいます。シンガポールは、職場では日本以上に女たちが活躍しているように見えますが、「男主外、女主内」という中国語があるくらいですから、一歩家の中に入ると性別役割分業が幅をきかせています。

シンガポールの学校は2部制ですから、午前の子供は家に帰ってくるし、午後の子供は午前中は家にいるので親が働きに出にくいようです。さらに、保育所が少ない、保育料が高い、パートの仕事が少ない(女性労働者の3%、日本は23%)などの事情により、子供を持つ女たちにとっては、フルタイムで働くか家にいるか、二つに一つの選択肢しかないようです。

フルタイムで働く女たちの中でも、高給りの女たちは、外国人メイドを雇うことで、女に課せられたいくつもの重荷を減らそうとするようですが、働く女たちの求める「ゆとり」がメイドを雇うことだとしたら、それは本当の問題解決にはつながらないのではないかと思います。男とともに、働き方と暮らし方を変え、一人ひとりが個性的に生きられるゆとりある社会を目指すことが必要ではないでしょうか。

女性と家庭教育

Khadee Ja Ibrahimさん
(モルディブ)

モルディブ共和国は、インド洋に浮かぶ1,190の小さな島からなる国です。これらの群島は、19の自治体に分かれます。首都のマーレ島は2平方マイルの広さで、政治、経済、文化の中心です。モルディブの人口は、1990年の国勢調査によれば、213,215人。48.72%が女性です。モルディブは100%イスラム教徒の国で、モルディブ人の単一民族国家です。

従来からモルディブの女性は、子供たちの教育に重要な役割を果たしてきました。イスラム教徒であるため、両親はそれが自分の役目だと信じて、子供が幼いときから、コーランの読み方や、毎日の礼拝の仕方を教えていました。そして、多くの場合、これを受け持つのは母であったり、祖母であったり、家族の中の長老の女性であったりしました。



▲屋外で学ぶモルディブの子供たち

性について

Elena L. Samonteさん
(フィリピン)

フィリピンでは、人口問題に大きな関心が集まっています。フィリピンの現在の人口は、6,200万人、出生率は2.3で、人口統計学者は、20~30年以内に人口が倍近くに膨れ上がるだろうと予測しています。家族計画や、親の責任を育成するプログラムなど、さまざまなプロジェクトを実施して、夫婦がいかに性、男女の役割、家族計画等に取り組むべきかを学ばせようとしています。しかし、おとなは自分たちの役割、価値、意志決定のパターンを既に身に付けているので、これらの試みは遅すぎます。最も効果的なのは、子供たちを教育することです。けれども、親たちは子供たちに一体何を教えているのでしょうか。

ある研究では、子供たちは親からきちんと学習を受けていないことや、作り話を伝え聞いていること、友達から聞く話が子供たちの情報源になっていることが報告されています。15~18歳の子供たちのまちがった認識、作り話には次のようなものがあります。

- 1 メンソールキャンディを食べ過ぎると、子供を産めない体になる。
- 2 陰のうを傷つけたら死ぬ。
- 3 女の子が最初に性的関係を持つときは妊娠する。
- 4 早く歩き過ぎるとヘルニアになる。
- 5 処女は性的関係を持つと出血する。
- 6 生理の血は汚いため、生理中に性的関係を持つてはならない。

他の開発途上国と同様に、モルディブでも性別役割分担があり、伝統的に育児と子供の教育は、母親の役目になっていました。モルディブのような群島国家では、昔から男は漁師として昼間は海に出て漁をするため、物理的に子供と一緒にいる時間があまりありませんでした。一方、女は、農業をしたり、薪を集めたりの仕事はありますが、昼間はほとんど家で過ごすため、子供の世話は女の役目になっていました。母親が農業や水産加工業に従事していても、家族の中の別の女性、つまり、祖母やおばたちが子供の世話や家庭教育の役目を受け持ちます。

1991年に行われた国の調査によれば、子供の教育についての決定権は、首都マーレで54%、環礁地帯で68%が両親が共同で有すると答えています。どちらか一方の親だけが決定権を持つと答えた場合を見ると、マーレ、環礁地帯双方とも、決定権は母親にあると答えたものが25%、父親にあると答えたものが11%でした。

モルディブは、準公式の宗教に基づく教育があることで知られていました。1989年で95%と識字率が高いのは、準公式の教育システムによるところが大きい。公教育システムが敷かれても、家庭教育の担い手としての女性の役割は減ることはありませんでした。むしろ反対に、今まで自分たちが受けたことのない教科を、家庭で子供たちに教えなければならないという重荷が加わりました。

これまでモルディブの女性は、伝統的に家庭内教育者としての務めを果たしてきたので、家のきりもりや育児に関して、男性と同等の立場を得ることとなりました。母親は、子供が幼児期に必要とするしつけや指導をするのに最もふさわしい人であり、その後の人生においても、子供を励まし続ける存在なのです。

子供たちはおそらく、自分とそれほど変わらない知識しかない友達から情報を得ているに過ぎません。それでは、性についての情報を得、正しく理解するためには、子供たちは一体どこで学ばよいのでしょうか。学ぶ場はほとんどありません。親たちも親としての責任を十分果たしていないと言えます。男の子と女の子の関係については学校の生物の先生から情報を得るのだと言う生徒もいます。

子供たちは適切な指導もないままにビデオテープを見、そのために子供たちは自分が思ってもみなかった状況になることもあります。たとえば、家族も友達もない家の中で、15歳の女の子が男の子とビデオを見ていて、若い二人は見よう見まねでテレビと同じことをしてしまっただけ、というようなことです。

もう一つ、子供たちが性について正しい知識を得る場として、メディアがあげられます。今メディア界では、墮胎、男女関係、婚前・婚外交渉、ホモ・セクシュアリティなどのトピックについて議論するトークショーがいくつかあります。また新聞のコラムニストの中にも、これらの題材についての記事を執筆している人がいます。このような人たちの中には、歯に衣着せぬ表現ややり方をする人もいて、各方面から不安の声が上がっています。苦情を言う親もいます。

このようなデリケートな問題についての子供への指導は、全く不十分だと言えます。

孤児院の子供たち

Keerthy S. Rajaratnamさん
(スリランカ)

スリランカ北東地域では、人種間抗争のために、1987年から1992年の間に、孤児院(ホーム)の受け入れ数を急きょ増やす必要がでてきました。これらのホームのいくつかは、この突然の孤児たちの増加に対処する体制がうまくできていません。北東地域には、およそ200か所の登録・未登録のホームがあり、6~12歳の子供、約8,000人を収容しています。私は1989年から1990年にかけて、スリランカ北東地域で孤児院における子供たちへのケアの質と量を調査しました。

調査は6か所のホームで行いました。そのうち1か所は村役場が運営し、5か所は宗教団体が運営していました。2か所は男子のみ、2か所は女子のみ、そして2か所は男女一緒に暮らすホームでした。これらのホームは静かな環境にありましたが、宿舎は狭く水道設備の整っていないものもありました。

ホームの子供たちの食べ物や量が適切だったのは、4か所のホームだけでした。男子だけのホームでは、子供たちは十分な服装を与えられていましたが、女子だけのホームでは、もっとよい服が欲しいと言う子供たちがいました。男子だけのホームでは、栄養不良の子供を見分ける特別な努力が払われていて、そういった子供たちには、牛乳や野菜、卵が栄養補給のために与えられていました。ホームにいる子供たちの80%は、よく面倒をみてもらっていると言っていたが、この80%の子供たちでさえも、世話係の人たちももっと多くの時間を割いてくれたら嬉しいのと言っていました。子供たちの20%は、カウンセラーによる指導を必要としていました。これらの子供たちは他の子供たちが遊び相手にしなかったり、グループ学習の輪の中に入れないような、いわゆる“のけもの”の子供たちです。しかし、ボランティアによるカウンセリングが行われているホームでは“のけもの”の子供の数は実質ゼロでした。

子供たちは皆学校に行っていました。60%は実際の年齢より下のクラスに入れられており、30%の子供たちは算数の成績が平均以下、あるいは苦手としていました。これらのホームではすべて宗教への信仰が強調されていて、世話係の人たちは宗教的崇拝と宗教的講話が子供たちにモラルを教え、子供たちを鍛えることになり、彼らが直面した辛い思い出をいくらかでも忘れさせることの役に立つのではという考え方をしていました。



▲孤児院では子供たちを励ますさまざまな行事が企画される



女性のジレンマ

Luwarsih
Pringgoadisurjoさん
(インドネシア)

これから述べるのは、ごく普通の働く女性たち、特に大都市で働く女性たちが直面している問題についての事例です。彼女たちのほとんどは経済的理由のため仕事に就かなければなりません。しかし今ではまた、教育を受けた若い女性たちが夢の実現や自己充足のために仕事に就くようになりました。しかし、問題は彼女たちが結婚して子供を持ってから始まります。彼女たちは仕事と同じくらい大切な問題に対処しなければならなくなります。彼女の1日の生活の

スケジュールは次のようになるでしょう。

彼女は朝5:00に起きます。もしそれより遅く起きると1日がすべて混乱状態になってしまいます。彼女は家族のために朝食の用意をしなければなりませんし、おそらくその間に赤ちゃんに母乳を与えなければなりません。赤ちゃんに母乳を与えながらも、彼女は後ろめたい気持ちになります。というのも、赤ちゃんは後はずっと1日中ミルクで過ごさなければならぬからです。折りしも、「赤ちゃんを母乳で育てよう。母乳は赤ちゃんにとってずっと健康によいから」というキャンペーンが盛大に行われています。

子供の健康を願わない母親がいるのでしょうか。そのために、彼女は仕事をあきらめてしまうべきなのでしょう。仕事はおそらくやりがいがたくさんあり、彼女はさまざまなチャレンジをしていけるのだと示したいのです。彼女にはまた小さな子供がいて、幼稚園に行かせるために起さなければなりません。朝早く子供を起して服を着せ、朝食を食べさせるのはやさしいことではありません。上の子は「くつ下がないよ」とか「宿題がまだ全部終わっていないからお母さんチェックしてよ」と叫んでいます。夫も起きてきて、コーヒ

国際結婚組の子供の教育

仲間まち子さん
(マレーシア)

マレーシアには、私と同じように国際結婚をしてこの地で生活をしている日本人女性が、50人以上います。相手はお国柄もあって、マレー人、中国系、インド系、欧米系とさまざまですが、多いのはマレー人と中国系の夫です。覚悟の上で日本を離れても、やはり、淋しくなったり夫と喧嘩をしたりすると、お互いに電話をして、ぐちを言ったり元気づけたりします。また子供たちが学齢期に近づく

と学校選びについて相談し、先輩たちの意見が大変参考になります。マレーシアの学校を、どの言語を用いて教育を行っているかという点で分けると、マレー語、中国語、英語の学校に分けられます。英語を使って教育しているのは、いわゆるインターナショナルスクールで、マレーシアの学校とは区別され、カリキュラムも学校独自のものです。マレー語が必須科目になっていない点が他の学校との大きな相違点です。

日本人学校へ通う子供、現地の学校へ通う子供、インターナショナルスクールへ通う子供と本当に十人十色ですが、一般に学校で習っていない方の言語を母親が家庭で教えています。

人間は、誕生直後にもう国籍という色が付き、幼児期には言語を持ち、また日常生活の中で習慣や文化が身に付きます。そして学校へ上がり成長してくると、言語、文化が次第にはっきりと自分の中で形作られてきます。そのとき、国際結婚組の子供たちは自分自身をどう捕えるのだろうか、自分の国籍と言語と住んでいる国が一致している場合はどうだろう、それらが一致していない場合はどうだろう、そんなことをよく考えます。

私たち国際結婚組の子供たちには、両親のそれぞれの文化や言語を両方とも知ってほしいし、また知る必要があるという気がします。子供は一人ひとり違うので、その子に合った育て方が大切ですが、親として、子供には両親の言語と文化を両方とも伝えていくことが子供への愛のような気がするのです。そうすれば、その子が自分自身を見つけ出すときの手助けになるのではないかと思います。

未来の僧

Oliver G.D.W.Jayashinhaさん
(スリランカ)

スリランカの大多数の人は仏教徒で、仏教徒である親たちの多くは厚い信仰心を持っています。このような親を持つ少年は、僧侶になりたいと熱心に思うことがあります。こんな気持ちから、彼らは親の同意を得て僧職に入ります。僧職授任式で、彼らは新米僧となります。

修業期間、新米僧は単純でつらい生活に耐えなければなりません。寺に住み、真面目に遂行しなければならないことになっている規則に従うのです。ほとんどの時間は、仏陀の法についての知識を高めるために、教典を読んだり学んだりすることに充てられます。後に、彼らはさまざまな機会に大きな集会で説教をしなければならなくなるからです。新米僧は鉢を持って家を訪れて回り、食べ物を持ってもらわなくてはなりません。人びとは徳を期待して喜んで応じてくれます。仏陀の教義によれば、僧はみんな自分で食べ物を見つけなければならないことになっていますが、今ではこの規則を守る僧は多くありません。また、新米僧は、寺の高僧や住み込み僧に同行して、仏教徒の家の招きで、その家のだれかが亡くなった時行われる仏事に参加することがあります。そのとき、僧侶たちは施し物もらい、その代わりに、僧侶たちは説教をし、仏陀のことを話し、遺族を慰め、死者に徳を移します。僧侶たちが寺に帰った後、式の参列者は御馳走をふるまわれます。この食事に参加することによって、死者は大きな徳を得ると信じられています。新米僧たちは何年もの間、仏陀の法について学び知識を得てから高位を受けます。この段階で、彼らは説教も上手になっていて、独立して任務を行うのです。

スリランカの有名な職業訓練センターでは、仏陀の法を海外に広めるための僧を訓練しようと、英語で特別授業を行うという取り決めがなされています。仏教僧によって仏陀の教えが説かれることによって、スリランカの国民は、共存、協調、団結、平和を維持できることでしょう。国民が規律のある、文化的な生活をする助けともなるでしょう。

一がほしいと言います。夫はコーヒーの入れ方も知らないのでしょうか。もちろん知っていますが、伝統的に家事は女性の仕事で、家族の幸福の責任は彼女にあるのです。

彼女は時間があまりにも早く過ぎていくのを気にしています。オフィスに遅刻するわけにはいかないのです。もちろん仕事にふさわしい身なりを整えるための時間も必要です。今日の予定表には、朝8:30からスタッフ・ミーティングがあり、その後、10:00に一つ、時間外にももう一つ予定が入っています。職場と家が遠いので、家に帰って子供たちの様子を見る事ができません。子供の世話をしてくれる親戚がいる家族は幸運です。しかしその場合でも、残業で遅くまで働かなければならない時には彼女はいつも罪悪感に悩まされます。もし子供たちに何か起こったら、その責任は必ず母親にあるということをよく知っています。彼女はしばらくの間仕事をやめて、母親業に専念すべきなのでしょうか。将来を約束された仕事をあきらめるのは残念なことです。近い将来にどちらをとるか決めなければならないことで彼女は悩んでいます。これは簡単な問題ではありません。

ロシアの家庭教育

Shkuropat Anna Vladimirovnaさん
(ロシア)

ロシアの伝統文化は、国内においては開かれた社会への、アジア地域においてはアジアの共存と協調への転換期にあります。その中で、極東は、西洋文化と東洋文化が混ざり合った特殊な地域です。

私は教育の専門家ではないので、私自身の経験から、ロシアの家庭教育を考えてみたいと思います。

私がまだ小さい頃、母がピアノを弾き、歌っている光景を思い出します。母は音楽が好きで、オペラ歌手のような素敵な声をしていました。6歳のとき、母は私に特別音楽学校の入試のためのレッスンをしました。しかし、私は第3次試験で落ちてしまいました。そのときが、私にとって初めての挫折でした。しかし、後に、私は普通の音楽中学に入学しました。何よりも、母の影響が強く、音楽に対する大きな夢があったからでした。

母はまた、英語が好きでした。母は、英語を特別外国語コースで学びました。彼女はよく近所の子供たちを集めて、ゲームのように英語のレッスンをしました。しかし、残念なことに、私の母もまた他のロシアの女性と同じように、労働のために多くの時間を割かなければなりません。そのため、家庭で母からレッスンを見てもらうことはあまりできませんでした。にもかかわらず、母は私にとってとても大きな存在であり、私が何か決めるときに支援してくれ、常に私の成功を信じてくれました。

ロシアの典型的な家庭では、幼い頃から子供に音楽や外国語を学ばせます。それはすべてのロシアの母がわが子に望む、文化的な最低基準のようなものです。私の友人たちは子供たちに、それが必ず役に立つと信じて、外国語と音楽を教えています。また事実、非常に役に立っています。

私は子供が成功する過程で、子供が自信をつけるために、母親が果たす役割は非常に大きいと考えます。母親は子供の内面の世界を共感できます。賢明な母親は、子供を導き、子供に独立心を持たせ、子供が成長してからもよい関係を持続させることができます。

農村プロジェクト

趙 競さん
(中国)

中国では人口の80%が農業に従事しています。昔は、農業経済の中で男性が農業生産の主要戦力になっていたので、社会の中での重要な地位は男性が占めていました。今日、歴史の変化によって、女性にこの地位が委ねられるようになりました。農村の女性は、農村経済の発展のために、その社会的重要性が認められてきました。しかし、農村では、非識字者の大部分は女性で、このことが新しい農業技術を学ぶ妨げとなっているだけでなく、女性の解放にとっても深刻な阻害要因となっています。

中国全土の農業女性の連帯を図っている中華全国婦女連合会は、1989年初めに他の政府機関と協調して、農村女性の間で「文化・技術を学び、達成と貢献を競おう」と題した競争プログラムを始めました。このプログラムは、女性に最新の生産技術を身に付けさせるだけでなく、識字率を高め、女性の潜在力を高めようとするものです。約1億2千万人の農村女性が、このプログラムに参加しました。

プログラムは、農民の間にセンセーションを巻き起しました。

穀物、綿花、油脂の主要な生産地にいる女性たちは、「1ムー(15分の1ヘクタール)につき1トンの穀物運動」を打ち出したり、「品質のそろった綿花生産競争」に参加したりしましたが、これが穀物、綿花、油脂の生産高を大幅に引き上げたのです。女性たちはほかに



も「蚕プロジェクト」、「がちょうとアヒルプロジェクト」、「野菜がこプロジェクト」と呼ばれる競争を行い、商品としての農産物の向上を行ってきました。山岳地帯では、女性たちは「3月8日緑のプロジェクト」という果樹の植え付けをし、また、貧困地帯では、関連事業や改良を行い生活水準を上げつつあります。

浙江省婦女連合会のリーダーは「学習と競争プログラムによって、女性は教育と経済活動への参加は密接な関係があることを理解することができた」と語っています。

53歳のハン・ユランは、河北省唐山市ダルトツワン村に住んでいます。長年、夫の野菜栽培を手伝ってきましたが、このプログラムが開始されて以来、ハンも野菜の新しい栽培法を学び始め、それを自分の農園に導入し、14種もの新品種を育てました。昨年ハンも、天津市野菜研究所から種子選別の仕事を委託されました。彼女の選んだ4種類の野菜は専門家に認められ、彼女の実験農場は、国の第8次5か年計画の科学的農業プロジェクトの本拠地としてリストアップされました。

学習と競争プログラムは、大きな成果を収めました。地方政府だけでなく、すべてのレベルの婦女連合会もこのプログラムを新しい視点から見直し、さらに推進していくつもりだと語りました。

第3期海外通信員紹介

フォーラムが海外通信員制度を設けて今年で3期目になります。アジア諸国と幅広いネットワークを結ぶことを目指すこの制度は、アジア在住者の地域に根差した情報が好評で、Asian Breezeでも通信員レポートの愛読者が多いようです。

今年度は15か国から28人の応募があり、通信員制度もかなり定着し、フォーラムの情報の輪が、確実に広がりつつあることが感じられます。この中から12か国16人が海外通信員として活動をスタートしました。

通信員活動の今年のテーマは「教育と女性」。教育が人間形成や社会発展に与える影響の大きさは計り知れません。そして、教育の状況を知ることは、その国や人を理解する上でとても重要です。中でも女性に対する教育は、「一人の女性を教育することは国家を教育することである」と言われるほどです。しかしながら、教育の目的、種類、内容、形式は国や地域によっていろいろな特色が見られ、また、一方で意外な共通点もあります。昨年度は「家庭教育」にスポットを当てましたが、「家庭教育」一つを取り上げても、子供に対するしつけ、学校教育の補足、技術の伝達など幅広い観点からレポートが寄せられました。さらに家庭教育は、学校教育や宗教教育など社会と密接につながっており、家庭の中だけでは語り尽くせないことが分かりました。

そこで、今年度は広く「教育と女性」について通信員の皆さんにレポートしてもらいます。学校教育、職業教育、識字教育、宗教教育、民族教育、教育に関する社会的背景などを切り口として、生活者の視点から、あるいは活動や研究を通じた専門家の視点から、女性や社会の姿を生き生きと伝えてくれることと期待します。

また、フォーラムでは、アジア諸国と縦横に伸びる網の目のようなネットワークを形成するために、昨年から女性情報マトリックス事業を行っています。事業では、北九州市民による委員会を結成し、海外通信員の活動テーマとリンクして海外調査を行っています。昨年は、中国、スリランカ、シンガポール、マレーシアを訪問することができました。今年も、昨年の事業をさらに進め、新しい関係を築くために海外調査を行う予定です。海外通信員の方がたとの意見交換や、交流も楽しみです。

では、1年間、アジアの“風”を送ってくれる新しい海外通信員の皆さんを紹介します。



▲マトリックス事業でのスリランカ訪問



國本 綾子さん
〈バングラデシュ〉

国際結婚し、夫の母国バングラデシュで、夫と一人娘、夫の両親やきょうだい計12人という大家族で暮らしています。北九州市出身です。



Zhou Jieさん
〈中国〉

フリーライターとして女性問題に取り組んでいます。中国の女性の偉業や考え、喜びや悲しみを広く海外にも伝えていきたいと思っています。



朱 耀 先さん
〈中国〉

今年の4月から河南調査・開発センターの女性調査研究所長。専門は社会学、女性学です。昨年に引き続き、通信員活動2年目です。



Malavika Karlekarさん
〈インド〉

デリー大学社会学部で教鞭をとるかたわら、女性開発研究センターの主任研究員を務めています。女性に対する暴力にも取り組んでいます。



Akkamadathil K. Rajuladeviさん
〈インド〉

デカン高原の都市ハイデラバードにある国立農村開発研究所の研究員です。開発が女性の農業労働者に与える影響について研究しています。



Swapna Majumdarさん
〈インド〉

ジャーナリスト活動を始めてから10年が過ぎました。活動実績が認められ、1991年にはダグ・ハマーシャルド・フェローを受けました。



Luwarsih Pringgoadisur, Joさん
〈インドネシア〉

女性と開発、特に教育や研修と女性の向上との関係について調査研究を行っています。若い女性に対する識字教育にも携わっています。



赤坂 むつみさん
〈ラオス〉

高校1年のときに訪れたネパールでの体験をきっかけに、国際ボランティアの道へ。現在、ラオスで森林保護や地域開発に取り組んでいます。



仲間 まち子さん
〈マレーシア〉

マレー人の夫と一人息子とともにマレーシアで暮らし始めて2年。友人も増え、この国に積極的に溶け込みたいと思うようになりました。



Sharad B. Shresthaさん
〈ネパール〉

長年、社会・地域開発に取り組んできました。特に、社会的弱者である女性や子供の問題を中心にNGO活動を続けています。



Khalid Hyderさん
〈パキスタン〉

パキスタンの四大紙の一つで記者や特派員を経験した後、1988年から在パキスタン日本大使館の情報部に勤務しています。



Estrella M. Maniquisさん
〈フィリピン〉

農業省勤務を経て、現在、デプスニュース・ウィメンズサービスの編集長。アジア各国の女性問題に関する情報をマニラから発信しています。



大和 洋子さん
〈シンガポール〉

6年間日本の高校教師をした後、夫の転勤に伴いシンガポールへ。1年間東南アジアの教育事情を学び、現在、職業学校の日本語講師。



Kanthi H. Wijetungeさん
〈スリ・ランカ〉

労働省で能力開発を担当し、現在は婦人局長。フォーラムが行った女性の地位向上のための行政官セミナーに参加しました。



Kamala I. Wickremasingheさん
〈スリ・ランカ〉

政策企画実施省で女性や子供のための開発を担当した後、現在は教育省勤務。スリ・ランカ児童基金のメンバーでもあります。



佐藤 志緒理さん
〈タイ〉

東南アジアとの文化交流の仕事に携わるうち、タイに強く興味を持ちました。現在、チュラロンコン大学でタイ社会について研究しています。

フォーラムの窓

タイのお正月

4月12日夜9時過ぎ、タイ航空でバンコク着。家族の共同調査も報告書の最終協議にやっとこぎつけた。もうひと頑張り。昨年5月、民主化運動が流血の事態になった時には、タイでの調査研究は当分ダメになったかとあきらめかけたのが嘘のよう。

それにしても今夜のバンコクは静かだな。車の渋滞もないし。定宿になったチュラロンコン大学のササ（小兎の意の愛称の外国人研究者宿舎）に着き、CUSRI所長のアマラさんに電話を入れてびっくり。今日と明日はタイのお正月でした。知識不足のため、お正月休みに押しかけた形になったわけで申し訳なく思ったが、ここまで来てはどうしようもない。タイのお正月を見聞きするか…と思いつつ就寝する。

翌朝、雨上りで緑がしたりそうな大学構内を抜けて通りへと散歩する。8時というのに汗ばんでくる。4月はタイの真夏なのだ。通りの向う側の歩道いっばいに、子供たちがずぶ濡れで水遊びをしている。と、思った途端、12〜3歳の女の子が、走ってきたトクトクめがけてバケツの水をぶっかけた。他の子も手に手に水鉄砲やボウルなどで乗客に水を浴びせかける。唖然として見ていたが、乗客である数人の若い男女は、びしょ濡れのTシャツをつまみ悲鳴を上げながらも、怒り出す様子もない。トクトクは笑い声を残して走り去った。（トクトク…ドアや窓がない庶民用のタクシー）

するとこちらの通りから、水がいっぱい入ったボウルをかかえて、少女が私に近づいてくる。思わず「やめて/やめて/」と後ずさりする私。少女は私がタイ人でないと分たらしく、「手だけ」という仕草をして近寄ってきた。ピクピクしながら手を差し出すと、そっと私の両手に水をかけ、サワディカーの合掌をして笑顔で私を通してくれた。ササに戻り、食堂の新聞で、これが「ソクラン」、タイのお正月の全国的な行事であることを知った。

アマラさんに聞くと、お正月には親さようだいとその家族が集まり、子供たちは父母やそれに代る年長者に新年の祝詞と贈り物をする。贈り物は主に入浴に関する品で、香りのよい石鹸やバスタオル、湯上りの腰布などとのこと。父親は集まった子やその家族に、ボウルの水をふり注ぎ、1年の無病息災・幸福を祈ってあげる。そして全員でお寺にお参りをする。これがお正月の行事らしい。

でも「お水かけ」は家庭内の厳粛な行事に終らず、路上で子供たちの日が一日の水遊びに発展している。お金もかからず、正装の人はいないし暑いからすぐ乾くし、そのくせ見ず知らずの人を巻き込んでの「無礼講」的な、全く無邪気で合理的な行事だ。タイの人びとの社会的性格の一端を見る思いがした。

アジア女性交流・研究フォーラム
主席研究員 篠崎 正美

INFORMATION

●第4回アジアセミナー

フォーラムでは、アジアについて理解を深めていただくため、平成5年(1993年)6月26日～7月31日の毎週土曜日に連続6回にわたって公開セミナーを開催します。

世界の人口の約6割が集中し、多様な民族、言語、宗教から構成されたアジア。—ソ連の崩壊による米ソ冷戦構造の解体、ECの市場統合など、国際情勢が目まぐるしく変化する中で、21世紀はアジアの時代であるとも言われています。しかし、依然、この地域の多くの国々には、貧困、飢餓、環境破壊などに苦しんでおり、その背景には、いわゆる南北問題が深く横たわっています。

そこで、今回は「アジアと日本の役割」をテーマに、アジア諸国の現状、日本とこれら諸国との関わりを学び、国際社会の中で私たちが果たしていく役割について考えていきます。

講師には、朝日新聞編集委員の松井やよりさんや東京工業大学教授の渡辺利夫さんなど、アジア問題の各分野における第一人者の方がたをお迎えします。特に7月17日は、セミナーの受講生以外も参加できる「アジア諸国の開発と女性たち：アメリカから見たアジア」と題する特別公開講座を行います。講師は「国連婦人の十年」ナイロビ世界女性会議の準備チームのメンバーとして国連で活躍し、現在はミネソタ大学教授のバーバラ・クヌードソンさんです。

皆様の参加をお待ちしています。詳しいお問い合わせは、フォーラム(093)551-1220まで。

●フォーラムが財団法人になります

アジア女性交流・研究フォーラムは、本年10月を目標に財団法人化を目指して、基本財産の積み立てのための募金活動や財団法人設立に必要な事務手続きを行っています。

財団法人化は、フォーラムの安定的・永続的な事業の実施には欠くことのできないもので、フォーラムが設立された時からの念願です。

これまでに、北九州市からの支援と、企業や個人の皆様からの募金により、設立に必要な最小限の基本財産の確保はできましたが、フォーラムが幅広い研究・交流活動を進めていくためには、より多くのご支援が必要となります。

皆様の更なるご協力をお願いいたします。

また、財団法人化を記念しての事業も計画しています。多くの皆様のご参加をお待ちいたします。

●第4回アジア女性会議—北九州

フォーラムは、「アジア女性会議—北九州」を今年も11月19日(金)～21日(日)に、北九州国際会議場で開催します。この会議は、フォーラムの「交流」と「研究」を統合する主要事業の一つとして毎年開催しているものです。

1950年に22億人だった世界の人口は、1987年に50億人に達し、2025年には85億人を越えることが予測されています。このような人口爆発は、開発途上国において人口が著しく増大したためであり、これら国々には、現在、環境悪化、食糧危機、人口の都市集中など数かずの深刻な問題を抱えています。

その一方で、先進諸国では逆に出生率が低下し、日本でも1992年には合計特殊出生率が1.50まで落ち込み、高齢社会の到来に拍車をかけ、社会問題化しています。

そこで、今回は、地球の未来と人口をメインテーマとして、こうした複雑な問題を抱える人口問題について、開発の視点からその構造的要因を探り、女性の人権、生命の尊厳、地球の未来について、ともに考えていきたいと思えます。

会議では、国際シンポジウム、研究と討論、ワークショップ、アジアパズルなど多彩なプログラムを予定しています。

詳しいお問い合わせは、フォーラム(093)551-1220まで。

編集後記

アジアの状況を知ると、厳しい現実と直面しながら現地で活動する方がたに頭の下がる思いがします。けれども同時に、それらを伝える情報の大切さを実感するようにもなりました。

Asian Breezeを手にするのが、アジアを考える小さなきっかけになればと思っています。 (〇)

※Asian Breezeに対するご意見や感想をお寄せください。
※掲載記事などの無断転載・複写を禁じます。



アジア女性交流・研究フォーラム

〒802 北九州市小倉北区浅野3丁目9-30 北九州国際会議場8F
PHONE(093)551-1220 FAX(093)551-7535